大淀三千風論

山本唯一

はしがき

大淀三千風は、寛永十六年（一六三九）伊勢の国に生まれ、延宝・天和・貞享・元禄と生き、宝永四年（一七〇七）六十九才で没している。元禄俳人には芭蕉をはじめ西鶴・鬼貫・信徳・来山ら傑出したものが多い。大淀三千風も彼らとともに注目される元禄俳人の一人であろう。

彼は、延宝七年（一六七九）四十一才のとき、一日に三千句を詠んでいる。当時吟詠のスピードをきそう矢数俳諧の風がおこりはじめ、一日に千句ないし千八百句詠ずるものがいた。三千句で彼が速吟のレコードを更新したわけである。その三千句は、仙台で詠まれたので一般に『仙台大矢数』と呼ばれ、西鶴が跋文を書いている。彼はそこで自ら「三千風」と号するようになったのであるが、彼の俳名はたちまち全国にひろまった。その後、天和三年（一六八三）、彼は全国行脚の途にのぼり七年間にわたる大行脚をおこなっている。足跡は東北・北陸・東海は勿論のこと、山陽・山陰・九州・四国と、まさに日本全国に及んでいる。この大行脚の記録とその間の俳句、俳文等をあつめたのを『日本行脚文集』という。

芭蕉は、元禄二年（一六八九）「奥の細道」行脚の際、仙台で三千風にあいたいと思い、彼をさがしたが、三千風はすでに全国行脚にいで、第一次の計画をおえ、そのころ故郷の伊勢にいた。そして生涯彼らはついにめぐりあうことはなかったのである。三千風は芭蕉をあまり高くは評価せず、芭蕉も三千風らの速吟俳諧には批判的であった。けれ

ども生涯を漂泊の旅のなかにおくり、俳諧を単なる言語遊戯的な遊びの文芸とせず、身をもって俳諧的な生き方をしようとしていた点は共通していよう。そしてそういう彼らが、俳人独特の生活態度・様式をつくり出す大きな力となりいわゆる俳人格なるものを形成せしめるに至るのであった。その点、三千風は芭蕉とともに注目さるべき人物だといってよい。三千風が他の俳人たちにおよぼした影響も決してすくなくはないのである。

生活態度や様式が芭蕉と三千風と似ていたとはいえ、その人生観や俳諧観は全く同じであったのではない。詩人的な資質においてもかなり違っていたであろう。ここでは芭蕉はさておき、三千風のいき方をまず考究し、ついで彼の思想とその実践とについて考察し、最後に彼の文学について論評したいとおもう。

一　俗物性と超脱性

三千風の生活を通して見られる彼の精神はまことに異様である。俗物性と超脱性とが同居しているように見える。

彼は「十五才の春より俳道にかたぶき、日本修行の心ざし思ひいれ、終にわすられずして、十五年前、先づ松島の名高き景色を一見せめ」（日本行脚文集）と思い、仙台へゆき、そして松島の景観に心をひかれて逗留するうち、知音も多くでき、思わず十五年間滞在したという。その間に「多くの朋友、数百の愛弟」（同上）ができた。「数百の愛弟」というのには、多少の誇張もあろうが、ともかく多くの知人・門弟のできたことは否定できまい。思うに三千風は松島にあって美景を友として隠棲してしまっていたのではなく、世俗にまじわり積極的に俳諧活動をしていたのであろう。延宝七年の『仙台大矢数』興行を見てもそれがわかる。大矢数興行など売名的な行為だといってもよかろう。そして彼は天和二年（一六八二）、『松島眺望集』を刊行した。松島の眺望をよんだ漢詩や俳句をあつめたものである。彼の松島への一方ならぬ愛が感じられる。が大谷篤蔵氏が「大淀三千風」において指摘しておられるように、この書の刊行にはある種の下心があったようである。それは本書が「国数四十余ケ国、作者五百余人」の作品の中から千五百韻取っているのであるが、彼はそれを手がかりとして全国行脚をしようと考えていたらしい。彼自ら『松島眺望集』で「今ははや都へのぼり気根矢数をも通し、又此集の作者たちに千世の友としなれば、（略）秋津島根の隅々を乞食めぐりて行脚の記をもかき」といっている。彼はすべてさきざきのことを計算して行動する。よき意味での

計画性とあしき意味での打算性とをもっていたと考えられる。

行脚に出ても、彼は自ら求めて人と交わり、その交わり方も社交的で、俗物臭が感じられる。『日本行脚文集』によると、たとえば、

柏崎に着く。宿の童に、此所に俳師やあると尋ねて、短冊す。

行くほたる一樹に尻をすゑさせよ

やがて長井氏似水をさきとして、五六輩とぶらひ、五月雨の折ふしとて、妙行寺にして、一会首尾し、各挨拶の句侍りし。

という。宿については早速土地の俳人に刺を通ずることを忘れない。また大阪では、来山、西鶴らに会い

名物や懐紙に茂る難波草　三千風

蛍の稀に汀砂さびたり　来山

埋れ柴車軸の里に影きえて　西鶴（日本行脚文集）

と詠んでいる。けだし『仙台大矢数』の縁で三千風が西鶴をたずね、来山亭で会ったのであろう。彼は大阪の俳人たちに対して、懐紙に茂る難波草は大阪の名物だとする。すなわち難波の俳諧は広く世に知られ、高く評価されていると称讃するのである。

三千風はまた、行脚中、売文的な行為をなしている。俳諧はいうにおよばず文章をも売っていた。『日本行脚文集』に彼みずから行脚中「（人びとの）所望にまかせ、寺社の縁起、山河眺望の記、其外銘々所作の行、諸芸の美章、兵法の記、一切狂言綺語の戯言、筆にまかせて綴りし」という。それらの文章は行脚文集中、至るところに見えている。「平泉ノ文」「湯殿山ノ記」「蹴鞠ノ記」「梯ノ眺望」「射和境地」「謡ノ記」「以安亭ノ額」「琴ノ行」「有間ノ温泉」「鍼術ノ文」「彦山ノ眺文」「鼓ノ文」「丸山ノ艶文」「大社ノ記」「浄土真宗ノ詞」「蘇鉄園ノ記」「盆山ノ記」「鳴門ノ眺望」等々枚挙にたえない。勿論その土地の景勝やその人の技倆・人徳をほめたたえる文である。恐らく書くことによって多少の謝礼はえていたのであろう。

しかし彼はなによりも一日三千句の『仙台大矢数』を行脚中有効につかっていた。大矢数を看板に旅をしていたともいえよう。

三千風の句は早咲のかをりかな　小柳

三千の句や浪越えし名の松の月　広長

三千歩一羽の雲路郭公　文峯

影ぞつきぬ三千風外いのちの月　梅巌

鄙荻口を重み三千風待てり露の如（ゴト）　烏口

名ぞ時雨る往来三千の風の長　　意　桂
賓客や一句三千の月を吐　　英　岸

これらはすべて三千風を迎える側の挨拶の句である。三千風は世人がそのような目で自分を迎えることを心の中では計算していたのであろう。彼が「三千風」と名のっていたことが、そのことを最も端的に物語っている。

三千風は、俗臭のつよい売名的俳人であったように見える。それは否定できない。けれども彼は単なる売名的売文業者であったのではない。彼は呑空法師でもあった。『日本行脚文集』の自序の最後に彼は。

俳名　大箭数寓言堂三千風大淀友翰部焉
異名　湖山飛散人　無不非軒　呑空法師

と署名している。彼は自ら「俳名」と「異名」とを名のっており、俳人としては大矢数を鼻にかけ文才をひけらかす俗物であるが、彼はまた法師として「無不非」や「呑空」の超脱的一面をもとうとしていたことは注目されよう。彼は松島在住中、瑞巌寺で禅を学んでもいたのである。

三千風の旅の服装は、行脚僧のそれであったのでもなく、俗のそれであったのでもない。彼は「其の形相、木のはしにもあらず、俗枝のをれにもあらず」（日本行脚文集）、「僧にあらず、俗に似ぬ」（同上）という。その点、芭蕉と同じである。芭蕉も自ら「僧に似て塵有、俗にゝて髪なし」（甲子吟行）、「僧にもあらず、俗にもあらず」（鹿島紀行）といっていた。さて三千風の風采と態度にはものにこだわらない超脱さが見られたのであろう。彼は「世をかろく月雪や呑む行脚仙　西松」「境界や福袋一ツ柿二ツ未酔」「秋とも思はぬ俗を離れし芭蕉笠　遊夢」と詠まれている。

南部の城下、盛岡に入りにたる。荘園肥腴の福地、閭村は、陽山の梁につらなり、市中は陰河の音に賑めきたり。年来鴈使の和友、太田幽閑子を覗けば、すいがいの隙より、犬のとがむるに、主、出むかふ。こはいかに、狂がるやつし衣や、いま西行にやといふを聞きて、矢立にて案内す。

一口鉢犬西行にほとゝぎす
卯の花泡の茶の飯あり　　幽　閑（日本行脚文集）

幽閑は三千風の風采を見て「狂がるやつし衣や、いま西行にや」という。三千風が「今西行」といわれたのは一再ではなかったらしい。豊前国大橋の近在宮市にあっては島柳浦に、挨拶の発句として「秋風の関今西行に夏衣」と詠まれ、三千風が「百日ぐろめの蟬の福袋」と脇句をつけている。三千風は、このように度たび「今西行」といわれてい

た。それは彼が行脚の歌僧西行に似るところがあったからであろう。ただ外相が一見似ていただけでなく、世俗的なものをすて軽い境涯に住し、極端にいえば「空」を行じようとする精神において一致するところがあったからと考えられる。

世俗的な俗物性と、それを超えようとする超脱性とが、三千風においては同居していた。超脱ぶりも、それをひけらかす意識がなかったとはいえまい。ことさら超脱をよそおうのは、まだ俗物的である。が彼は、実はそのようなものをも含めて世俗的我意識をうちやぶり、絶対自由の境界にいたろうとしていたのであり、そしてそこにこそ俳諧の世界が現成すると考えていたようである。

二　思想とその実践

『日本行脚文集』の序で三千風は自己の人生観をつぎのようにのべている。

咨、寛器なるかな心、此心衛門、二儀両匠の時計師におほせて、五ツの糸車を仕かけ、吾等ごときの五運象を調ぜしめ、眼、耳、立、居、自在循環と舞はする。

三千風は、ここで「心衛門」という。「心衛門」とは何か。彼はそれを同書において、ときに「独の虚霊主」「乾坤の正主、物理の陽父陰母」と説明する。「心衛門」とは、天地の主であり、ものの理を理たらしめる根源、人間をも人間たらしめているものなのであろう。彼は仮りに心衛門と呼ばれる正主が天・地の細工師に命じて自分たちのような木偶をつくらせる。われわれには、元来「我」なるものはない。われわれは、主体性をもって行動しているのではなく、舞わされている木偶なのである。万物は心衛門の思いのままであるとする。この考えは主として『荘子』からきていよう。『荘子』には、造物者が天地をもって大鑪とし、万物を自在につくるとの考えがある。造化は偉大であって人を鼠肝となすこともできれば虫臂とすることもできるという。もっとも、三千風の思想が『荘子』の思想の通りだというのではない。彼は、自身「其の形相、木のはしにもあらず、神根、儒花、釈実、老枝、荘葉、皆以て天下至道の一樹なれば、此の下津落葉を、俳の攫にかきまとひ、雑物の袵に圧込」という。諸思想や諸教を取りいれて自己の思想としているのである。

さて彼は「形あるものは、象につかはれ、相なき物は、空につかはる。大本とよばれし中も、亦中につかはる」という。すべてものはものにつかわれている。「中」も自

己自身につかわれている。「つかわれる」とは、他に左右されることであり、真の自由、自在をえていないことである。そこで彼は「只つかはず、つかはれずしてありなん」と思うのである。他をつかうところには、自由がありそうである。が他をつかうことは他の自由を束縛することであるとともに、自己の自由をも失うことになろう。なぜなら自己がつかう他者は自然我らを制約してくるし、つかおうとの意識をもつこと自体、己れを制約することになるからである。つかわれる場合、自由を失うことはいうまでもない。三千風のいう「つかはず、つかはれず」という境界こそ真の自由の境界であろう。が「つかはず、つかはれずありなん」と思うのも、すでにその思いにつかわれていることになる。その思いももたず絶対自由であることが望ましい。三千風は「しかじ、天を笠にかぶり、地に鼻緒すげて、起念生滅の畔堵を平地し、自他の境藩をやぶり、野平等の大道にあそばめや。万物吾體なり、人みな兄弟なり、頑会をふり、手を放ち、足を歩くに、障はるものなし、さはる物あらば、物とよく融通」という。彼は、一切の自他の対立を越え、平等の大道にあそぼうとする。万物が吾が体であり、人みな兄弟であれば、天地の間を濶歩してさわるところがない。これは老荘的にいえば、「斉物」の理を知り、「一」を体認することである。三千風は空を行ずるとする。前項で述べた「呑空」である。「虚空一口平呑了」とか「胸次呑空」なる語が『日本行脚文集』にたびたび見えている。彼が「空」を呑却して絶対の自由をえたいと考えていたことは否定できない。

では如何なる方法で「空」を呑却して、大自在をえようとしたのであろうか。彼はまず行脚を通してえようとする。

三千風は、大行脚中、つぎの語を書き「行脚の覚悟」「自戒自慎の誓語」として首にかけていたという。

一、不惜身命を思定、今日切の境界、無常迅速、夢幻泡影忘るまじき事。
一、色欲身欲、名聞欲を可離事。附情慢心可慎事。
一、五戒勿論也。但し飲酒、妄語の二戒は、事によるべし。他の為善事には、偽も可なるべき事。
一、山賊、追剝等に逢はゞ、裸にて渡すべし。若し殺害に及ばゞ、首をのべて待つべし。死て敵を取るまじき事。附四寸の小刀の外、刃を持間敷事。
一、衣食居は、天道にまかすべし。当季の外、衣は可捨事。
一、船賃、木賃、茶代、少しもねぎるまじき事。

一、中途にて、乞凶非人に慈悲を加ふべし。且つ病人には、所持の薬可レ与事。
一、文筆所望なきに、書くまじき事。但し望む人あらば貴賤を不レ撰、一言も否といふ詞出す間敷なり。自作の外、他作の文法書く間敷事。
一、一足も馬駕に乗るまじき事。但不レ及バ山上の道は、折によるべし。

右の九ヶ条、仏神に誓ひ、心戒を定むるものなり。若し此の意趣を破る心ざし出でば即歩に立ち帰るべし。若し病死する事あらば、行脚の日記と、此ヶ条を古郷へ送り給ふべし。

死して後かばねの事はさもあらばあれ
取置てには烏狼

産国勢州射和村大淀氏三千風判

（日本行脚文集）

諸国旅宿衆中

これによって三千風の行脚の覚悟を知ることができる。そしてそれは彼の「空」を行ずるすべでもあった。彼は自己にむかって「不惜身命」を思い定めよという。不惜身命が彼の基本的な態度である。それは自己の身命を惜しまないことであり、自己自身に執しないことである。そのためには、人生の無常を深切に思い、無常迅速と夢幻泡影を忘れぬことである。それは取りもなおさず今日切りの境界と覚悟することであろう。この第一条が根本であり、第二条以下はそれの実践上の具体的事項である。それにしても諸欲をはなれ憍慢心を慎み五戒をまもれという。山賊・追剥に逢わば、すべて渡せという。これはしかし危害をおそれ命を惜しんでのことではない。物欲をすて精神的自由をえんがためである。すなわちもし殺害に及ばば、首をのべてまてとする。身命をおしまないのである。しかも「死て敵を取るまじき事」ともいう。怨讐を越えるのでなければならない。「衣食居は天道にまかすべし」以下、諸条すべて無欲・無我の実践である。したがって死後の肉体など気にしない。「死して後かばねの事はさもあらばあれ取置てには烏狼」と詠む。肉体は烏狼の餌食となって、別に心をいためることはない。しかし彼にも一つ気になることがあった。「行脚の日記」である。日記だけは故郷へとどけてほしいと願う。

右のような覚悟をもち、もしこの意趣を破る心ざしが生ずれば「即歩に立ち帰るべし」と強い決意をもって出発したのである。三千風にとって行脚は自己否定の行であり、死への門出でもあった。したがって、いよいよ出発となると悲壮な気持にならざるをえなかった。彼は出発の時のこ

とを記して

卯月四日、けふ夜をこめて立つ。多くの朋友、数百の愛弟、道送して泣く〳〵別れんとす。独歩に思ひ出ぬるうへは、もし行方も知らぬ煙と隔つ事もこそあれと、けふを命日にしてたうびよ、と打ち泪ぐみて

けふぞはや見ぬ世の旅の更衣　（日本行脚文集）

という。そして人びとと別れ、一人になっては「聿いかなる我なれば、他もすゝめぬ行脚を思ひ立ち、十五年住みなれし、余波をしまの菴、荒れん事をも省みず、末の松山波こさじと契りし、附翼同机の友をふり捨てけん」と思う。さすがに「見ぬ世」への旅と感じれば、悲壮な気持にもなったのであろう。

三千風は前記の覚悟をもって旅にいで、しかも途中から帰ることなく、所期の行脚を成就した。そして彼は「既に天和三亥の春、奥州仙台を首途し、この年の卯五月まで、大旅五年、猶見残し、再順二年、元禄二巳の年まで、首尾七年に行脚成就し侍る。凡そ道往三千八百余里、一足も栄耀の馬籠にのらず、一宿借りかねし事なく、一飯に飢えたる事なく、一病の障りなく、一言の争ひなく、万ッ満足の功をとり、一生の大願望の本意を遂げし」（日本行脚文集）という。彼の旅は、恐らく彼の覚悟の一々を実践して成就したのであろう。

行脚は、彼にとって肉体的な苦行であったのみではない。精神的な修行の場でもあった。色欲、身欲、名聞欲をさり憍慢心をつつしむべきところであった。すなわち「忍」に徹するのである。三千風は旅中「忍」の一字をまもることを心がける。「忍」とは忍辱である。彼は、行脚中のつぎの一小事件を書きとめている。道連れの男と二人で、若狭の小浜から宮津にむかう途中のことである。

さてしも草鞋はきかへんと、道端にて手頃の石を取り、茶屋の端にて丁々と打ち腐す。しばらく有て、裏口の編戸をかさ〳〵とまはし、三十余の家とうじ闖問、丸をにらまへて気色かはり、声のかぎり出し、こはきたなし、そこなお坊よ、かばかりの石も、いかばかり外々が肩を労せしに、とりちらしつ、といらなく嘖る。予は、やをら思ひよらず貌して、笑み打まげ、こなたの事にや、とむかふを見れば、ゆふご棚の陰に、埴ぬりの圜あり、その雨落に、此の類したる石廿卅積めり。此の石なりと思ふなめり、と言を巨々らしう打しづめて、いざとよ、此の石はよな、そこにも知り給ふごとく、あれなる草の原より求めきつといへば、家々いと腹あしくいきまきて、よくも偽りをたく

み給ふよ、吾今とれるを見し物をと、貌の艶して、予が袵（ヒラツ）を椽より下へ突きこぼちぬ。時に道づれの又三郎をのこ、堪へかねて、つと立ちより、家々の胸倉をかい掴み、かた手は、予が持たる石を奪ひ、いざ此の石を抜きし穴を見せてん、にげなきをうなの雑言かな、只人（タヤウド）にすらあらめ、如法の出家に無実をいひかけ、放逸のふるまひ、いで物見せむと発憤（ムツガリ）きこゆればあなやと切にすかし扱、手をさげて漸う〳〵襟手（エリデ）を放ち、やゝ丸が詐をこそいひつれ、此の石とりし物をと、厠の軒にをさめ、いざや、よしなき地獄ごとかな、機嫌直しに茶たうべむ、可愛餅（ウツカシキカチン）もこそとうち戯ぶれ、銭おほくちらし見せて、いかに可々（カ）ごぜよ、旅店に往還の人の情に稼（ナリハヒ）する身の、さやはいふものか、言をなよゝかに饗（アルジ）し給へ、さなきだに、をうなは罪ふかしなど、いさめつれば、かゝも後は打ち笑ひ、さにこそ侍れ、をうな心のあさはかに、あやまり侍るといひし。三四銭置くべきを、十銭ばかりまきて立ちぬ。又三郎は、まだ腹をすゑかねて、かゝる鬼籠る屋には長居し給ふな、代も過ぎ侍り、隣の軒にと袖牽く。暫しもてしづめ、又帰りにこそとて行く。男も尻につきて来れるが、手をはたと打ち、嗟（ア）よく堪忍し給ひつれ、我が身はいまだ悔しく侍る。あのをうなめを打ち叩かぬこそ本意なけれ、げには忍辱の御僧なればさも侍らめ（略）といふ。

ここで語られている三千風の態度の中心は「忍」である。忍辱をもって人の怒りをやわらげ、愚癡の人を教化したのである。

三千風は、ただふと「忍」を思っていたのではない。「忍」は彼の行の中心であった。『日本行脚文集』に、つぎのごとき「忍ノ銘」なる文がある。

大（イナル）哉、寛楽（ナル）哉、忍の一字は衆妙の玄基、神仏出生の太衛門なり。謙退無我の父母（カゾイロ）として、上を敬し、下に和し、忍は五常の仁帝、三徳の明君、律の源祖なり。慈淵智海の船筏、明徳至善の梯（カケハシ）なり。此の忍を能く行ふ時は、天地陰陽、邪正平等、事理不二の大道門を出で、胸裏別乾坤に天窓（アカツ）をふり、肱を曲げて金殿とし、冷水を呑みて七珍なることをさとす。於（ア）、寛大なるかな忍（ニン）、むべたのしいかな忍。

忍牛（ニンギウ）に乗り得て跡をかへりみれば
賢愚邪正の山坂もなし
讐なるも敵も不便なる時は
忍ぶてふ文字の分別もなし

風にあたまはられて睡る柳かな

三千風によれば「忍」こそが万徳の根源であり、それを行なえば相対を越えた絶対の世界に入りうる。そこにあっては肱をまげて枕とするごとき陋巷の茅屋も金殿となり、冷水も七珍の味がする。寛楽の世界がひらけ、精神の絶対自由がえられる。たとえば柳は、風に頭をはられても睡っている。それは柳が「忍」に徹しているからだとするのである。

「忍」の思想は、どこからきたのであろうか。三千風はやはり『日本行脚文集』において、友と枕をならべ「心」の咄をしたときのことを記している。彼は、そのとき彼がまだ若かったころ、ある老師からきいて肝に銘じていることをのべる。すなわち「我、人を訕(ソシ)るうちは、我もそしられ、他(ヒト)を悪(ニク)まば、我もにくまるゝとおもふべし。此の理を自問自答して、もはや世に一人も悪(ニク)しとおもふ人なき時、我をもにくむ人あらじと知る時、忍(ニン)の一字をさとり、無我の大虚に出て、極楽の四門ひらけ、紫冥(タカマガハラ)の中道を見通し、躰広く、心融通(ユルヤカ)に、四海兄弟、万物、一平等を心とせり。かつ又肝要の一言あり。万物、万鏡といふ事を忘るべからず。そのゆゑは、万の物を皆鏡と見るべし。犬を鏡にして(オノレ)は、飯をあたへ、猫を鏡にしては、魚をあてがふ。己笑顔をしてむかふ時、万物鏡ならずといふ事なし」と教訓せられたという。三千風はこの教訓を心に思いはさんでいたためか、自分は「終に貌に枹(モミデ)して、一言も他と争ひし事侍らず、尤も善にほこらず。輩(ラ)にあらそはざるは、一生の栄花、是に過ぎたるはなし」という。高い地位や財宝の多きをもって栄花とするのではなく、争わないことをもって「一生の栄花」としたのである。

彼は、旅において「不惜身命」の覚悟をする。が不惜身命とは「忍」に徹することであった。彼が「行脚の覚悟」としていたことは要は「忍」の一字に帰すであろう。「呑空」への道は「忍」の門を通ることでなければならなかったのである。

三　俳諧観

三千風にとって俳諧は如何なる意義をもつものであったであろうか。また彼は、俳諧の核心たるその精神をどのように考えていたであろうか。彼の俳諧観を見てみよう。

人間を主体性のない木偶と三千風は見る。乾坤の正主が「吾等ごときの五運象(ダウルボ)を調ぜしめ」見、聞き、立ち、坐らせる。自由自在にくるくる舞わせると見る。このような人間観をもつ人は、どのように生きることができるであろう

か。実人生に四つに取りくみ、社会的な生活に精力を集中することはできないであろう。人生をそれほど価値あるものとは受けとっていないからである。しかし人はなんらなすことなく生きていることはできない。生きているとは何かをなしていることである。さて三千風はいう。「人みな徒（クヒ）には居らず、かならず嗔（スサミ）あり。色弗（ヤツガレ）、空鐘（コマ）まはせし昔より、虚道の俳諧を逸（スケ）り」（日本行脚文集）と。人は徒然でいることができず、必ずすさみが必要である。三千風にとって、俳諧がすさみであった。すさみや慰戯に、人は全身全霊を打ちこむことはまずない。三千風も慰戯でありすさみである俳諧には軽い気持で対する。けれどもその軽いものに彼はたよらざるをえない。三千風は、俳諧をすさみとしつつ、しかもそれに自己を托すのである。さきにも述べたごとく生きている以上、人は何かをなしていなければならない。とすればすさみをすさみとしつつもそれにすがりつかねばならない。すさみがすさみでなく、自己存在のよりどころとなり、生きるささえとなるのである。三千風にとって、俳諧はそういう意味をもっていた。彼は自ら「一生独貧の俳狂ならむ」（日本行脚文集）ことを思うという。この点も芭蕉と共通していよう。芭蕉も「百骸九竅の中に物有。かりに名付て風羅坊といふ。誠にうすものゝかぜに破れやすからん事をいふにやあらむ。かれ狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごとゝなす」（笈の小文）という。人生無常を知りつつ狂句をこのみ、一生のはかりごととする。彼らにとって、人生は絶対的立場から見て、さほど価値あるものではなく、生きる意味もあまりあるのではなかった。そういう中にあって俳諧が生涯のはかりごととされたのである。すなわちそれがすさみと考えられ、狂句とされつつ、しかも真剣に取りくまれたのである。

三千詠の俳諧観には、二つ注目すべき点がある。一つは自己の風を立てようとせず、各派とよく融通するを主義としている点である。いま一つは、彼が呑空的自在の心境をえて、それを句にしようとしていた点である。

第一の点について考えてみよう。三千風は、貞門対談林の見にくい論争や談林内部での確執をつぶさに見聞し、ときに自らもその渦中の人となった。高政、西鶴の確執にまきこまれたのが、例の『仙台大矢数』である。西鶴は『仙台大矢数』の跋文で、三千風をほめ高政、紀子を批難する。三千風は、それを迷惑に思っていたらしい。さて彼はその当時を回想して「いつの頃にや有けん、俳風混乱して面々葉落（ばら）〳〵になり、難文の闘、俳風の闘（トキコヱ）、止む時なし。漸う〳〵動いて静かならむとすれば、密に譏り、やはらか

に褊す。これもかつは俳繁のゆゑなればならん」（日本行脚文集）といい、自分の態度にふれ「愚老如きの、他の下風につくどちは、時々の風に推し移るも多かりし。只それもよし〳〵とて、あらまほし。せんずる処、此道は、世間の浮説、小隠不善をなさじ、と日暮らしのすさびなり、と野子などは思ふが、但し是も亦偏見か知らず、大やう多分につかめやも」（同上）という。「愚老如きの他の下風につくどち」とは、謙辞であろう。が必ずしもいつわりであったのでもない。そしてそういう人たちには、時々の風に推し移るものも多かった。時流にしたがって句風をかえてゆき、自己自身の風というものを主体性をもって打ちたてようとするのではない。三千風は「只それもよし〳〵とてあらまほし」と考える。この発言には、時流にながされた自己を弁護する気持も幾分ひそんでいよう。が彼が俳諧を所詮「世間の浮説」にすぎず、すさびであると考えていたことにもよろう。けれども三千風には、いま一つ重要な理由があったであろう。彼は「俳諧ノ文」において、「俳要をいはゞ、只変化のはしなき事を諭して、かりにも人我の相に居らず、我流に落すべからず。万品に偏頗なく、扁見は道の辟なりと思ひ、よく他流に融通し、千変万化の自在を得べし」という。そして彼はまた「先哲ノ曰ク、歌道は、必ズ我流に落つることなかれ、万法によくおしうつれとなり。ことに俳は、万物の器なれば、尤も扁まじき事か。（略）とかく八万気々の好み好みなれば、其の席〳〵の宗匠の心〳〵に、循環するやうをこゝろがけ、偏に我を立てぬ和風にしくはあるまじきか。」（日本行脚文集）という。三千風は一方に偏することをきらい、他人と対立することをさける。人我の相におらず、千変万化の自在の境に住する。それが彼の理想とする生き方であったからであろう。

俳諧について、三千風は何ら定見を有せず、ただその席々の宗匠の心によっていた利巧で打算的な社交人のようにも見える。が、彼は俳諧の根本について一見識をもっていた。それは彼が自在の心境をえて、耳にする松風水音をすべて妙音とする境界にいたることをもって、俳諧精神の真骨頂としていたことである。「造次顚沛、皆是三十一字、松風水音、皆是俳吟」とは彼の言である。これが注目すべき第二の点である。彼は「俳諧ノ文」においていう。

万法一貫の糸文をもて、自己一心の手頭子を柔顔に作り、万鏡にむかふ時、万物吾顔ならずといふことなし。心柱の柄付撓まざれば、随縁の動静にも煩はず、転変浮世の得失にもなづむ事なく、旦暮無窮界に緩々として、誹心の常室に謔き、造次顚沛、皆是三十一字

松風水音、皆是俳吟、万色一趣向、神代の月、今朝の曙、儒日の光りも、今の昼、三会の嵐も此の暮を吹く。三時不可得の一句目前にあり。於、手には、不生の翰をかざし、口には阿吽の莫をふき、夢のうき世の中舎のと、うたひあはめつゝ、うつくしき阿法となるは此道なり。

柔軟な心をもてば、ゆるゆると無窮界にあそぶことができる。これは偉大なる無我の境界であり、無分別の境界である。そしてその偉大なる境界とは「肱を曲げて金殿とし、冷水を呑みて七珍とする」ごとき世界である。常識をひっくりかえした世界であり、常識の立場からみれば「阿呆」であり「狂」だといわねばならない。現に三千風は、自ら「独貧の俳狂」といっていた。「独貧」は常識的世間人の望むところではない。「俳狂」とてそうである。俳狂とはざれくるうこと、俳諧を口にしつついわゆる常軌を逸した行動をすることであろう。がそのような独貧の俳狂になることによって、松風水音がすべて妙音ときこえてくる。三千風は、そのような境界を俳諧の根源と考えるのであった。

彼は、宗鑑にその理想的な俳人像を見ていた。三千風は四国の讃岐にわたり、宗鑑が晩年住んだといわれる一夜庵のあとをたずね「一夜菴ノ記」を書く。

抑々此の翁は、俳諧の棟梁として、俳徳の陰行、一生一瓢に肱をまげ、和孫晨といはれし老なり。それよりこちつかた、其の風派をしたひ、其の口似せし人、幾千万ぞや。されど、その口は異ならずして、其の心のひとしからぬぞ口おしや。おほくは俳才にほこり、世慾の便とし、あるは名利の俳板を販ぎ、俳錦の伶を腰に閲かし、俳学士と呼ばるゝはあれど、俳徳無我の真人は、今にひとりもなく、終に鑑師伝心の拈花に悪笑をだにせし二祖、世にあらはれぬ事の本意なさよ。くだれる世の悲しさは、和宗大道の宝器うちやぶれたり、いかにかくなりもてゆくを、堆下白玉の霊公、護の神となり給はぬにやと、且は恨み且は身をかこつ。あゝ俳禅の悟入は、よく〳〵ふかきもの哉と、自己闇俳をしりてやみぬ。さすがに無常迅速の掟を教へ、三世を一夜菴と悟り給ふを

入相のかねや月を買ひ出す一夜菴　（日本行脚文集）

三千風は、世俗の俳人は多くは俳才をほこり、俳諧を名利のために利用する。ただ宗鑑のみが真に俳諧の精神を体現していたとする。すなわち「俳徳無我の真人」という。真人は、『荘子』などに説かれている。『荘子』では「有二

真人ニ而後有ニ真知ニ」「何謂ニ真人ー。古之真人不レ逆レ寡、不レ雄レ成、不レ謨レ士」といっている。いう意味は福永光司氏著『荘子』によれば「あらゆる境遇をただ天命として無心にその天命に随順してゆく人間である。彼はあらゆる境遇を天命として随順してゆくから、『寡に逆らわず』―幸い寡き逆境に処しても之に安んじて逆らわず、『成んなるに雄らず』―威勢盛んなる栄達に身を置いても心驕ることがなく、『士を謀らず』―人生の万事をただ在るがままに受取って思慮分別を用いることがない」ということである。かかる境界が、とりもなおさず「無我」なのである。三千風は、そこで俳禅一致を考え、宗鑑を「俳禅悟入」の人と見ていた。

三千風はさきに述べたごとく「大箭教寓言堂」の俳名と「無不非軒呑空」の異名をもっていた。彼にあって、両者は合一する。俳人たることが「無不非」「呑空」であることであり、「呑空」であることが俳諧寓言堂を真に俳諧寓言堂たらしめることであったのである。

四　詩的感動の欠如

三千風の理想とする文学的境界は「松風水音、皆是俳吟」ということであった。それがそのまま実現されておれば、三千風の文学は文学的にも宗教的にも、高く評価されるであろう。彼の宗教的体験は「松風水音」をそのまま仏身の発現と受けとるところまで近づいていたもののように見える。虚空を呑却して自由をえていたもののようである。が作品には、松風が松風とひびかず水音が水音ときこえない。絶対の世界とはやや違った世俗臭がつきまとう。

祇園涼み床賃はたる烏かな　（日本行脚文集）
夕涼み鳶風をひく川原かな　（日本行脚文雄）
滝の糸を手玉におよぐ蛙かな　（日本行脚文集）
夕月の端薫来や阿蘇の嶽　（日本行脚文集）
五月雨は臥竜の松のよだれ哉　（日本行脚文集）
妻良子浦やひよくの浮巣鴨の船　（日本行脚文集）

「床賃はたる」とは、祇園の涼床の代金をせびりねだることであろう。いつも餌をあさる場としているのに、涼床で、川を利用される。その場所代を烏がせびるとする。如何にも俗な考えである。「鳶」が涼しすぎて風邪をひくというのも、俗な想像にすぎる。「滝の糸」を蛙が手玉にとって自在におよぎ、「夕月の端」を火山がこがすという。これまた陳腐な見立てである。「五月雨」を臥竜の松のよだれと見立てるのも卑俗であろう。「妻良子浦」に比翼の鳥の浮巣があるというのも、地名の妻良子にちなんだ連想

で、そこには呑空的なさばさばとしたものがない。

これは一体、どうしたことであろう。彼が俳諧を「狂言」と見、「戯言」とし、他人の風にさからわぬことを第一としていたことにもよろう。がそれ以上に、重要なことは、三千風に詩人的感受性にかけるところがあったことである。そのことについて少し考察したい。

三千風は、「忍辱」をモットーに、「呑空」を行じようとする実践者であり、その点俳諧を身におこなう「俳諧の人」（去来抄）であった。が彼は、観念や言語や文字の遊戯に興味をもち、ものそのものにはあまり関心をしめさず、もののもつ美に心うたれるということが少なかった。それを芭蕉との比較において見てみよう。芭蕉と三千風がともにおとずれた名所・旧蹟がある。そのようなところでの両者の感懐を検討すれば、両者の本質的な相違もはっきりしよう。二、三、例をあげる。

芭蕉は、奥州行脚のとき、白河の関を通って、感動し、一代の名文をつづっている。

心許なき日かず重るまゝに、白川の関にかゝり旅心定りぬ。いかで都へと便求しも断也。中にも此関は三関の一にして、風騒の人心をとゞむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に茨の花の咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し衣装を改し事など、清輔の筆にもとゞめ置れしとぞ。

卯の花をかざしに関の晴着かな　曽良（奥の細道）

芭蕉は、能因が「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」（後拾遺集）とよみ、源頼政が「都にはまだ青葉にて見しかども紅葉ちりしく白河の関」（千載集）とよんだことをおもい、身のひきしまるのを感じたのであろう。古人が冠をただし衣装をあらためたことにならい、芭蕉も衣の襟を正したことと思われる。曽良の発句がそれを物語っている。白川の関を越える芭蕉の緊張感は一通りではなかったらしい。そして彼は、白河の関では「風景に魂うばゝれ懐旧に腸を断て」句を作ることができなかったと『奥の細道』でいっている。芭蕉の感動のひとかたならぬものであったことが知られる。ところで三千風も白川の関をたずねているが、白川に関しては

卯月三日、須賀川を立ち、白河の関につく。

秋かぜにあれてのゝちも白河の
関屋と名のるほとゝぎすかな（日本行脚文集）

と記しているのみである。三千風は、白川の関跡にたって、藤原良経の「人住まぬ不破の関屋の板びさし荒れにし

後はたゞ秋の風」（新古今集）の歌を思ったのであろう。荒れて跡方もない旧関で、良経の歌を思い、それをふまえて和歌を詠もうとすることは自然である。が三千風のおとずれたのは、卯月で時鳥の季節である。本歌とは季節があわない。それなのに本歌にたよりすぎ「秋かぜにあれてのゝちも」と歌い出すのは、如何にも不似合である。思うにそれは彼が真実の感動もなく、知的観念的に一通りの感懐をのべようとしていたにすぎないからであろう。

さて西行が「道のべに清水流るゝ柳蔭しばしとてこそ立ちとまりつれ」（新古今集）と詠んだ柳、謡曲「遊行柳」で知られている芦野の里の柳を両者がおとずれたときはどうであったか。芭蕉は殺生石を見てから、柳を訪う。そして

清水ながるゝの柳は芦野の里にありて田の畔に残る。此所の郡守戸部某の、此柳みせばやなど折〳〵にの給ひ聞え給ふを、いづくのほどにやと思ひしを、今日此柳のかげにこそ立より侍つれ。

田一枚植て立去る柳かな　（奥の細道）

という。かねてから西行ゆかりの柳を「いづくのほどにや」と思っていた。その柳蔭に立ちよった芭蕉は「今日此柳のかげにこそ立より侍つれ」と深い感懐をいだく。そしてしばし柳蔭に立ちやすらって、西行追慕と懐古の情にひたるのであった。ところで三千風は、

けふ既に下野の国、那須野に入る。かの道の辺柳、殺生石を見侍りし。

旅衣洗濯告げよほとゝぎす
泉影見る人を釣るやなぎ哉
夏痩は西行御絵の柳かな
石魂や素の大虚にほとゝぎす　（日本行脚文集）

という。三千風は、「かの道の辺柳、殺生石を見侍りし」と、見た事実を簡単に散文的に記し、句を四句詠んでいた。しかして四句のうち「旅衣」の句は那須野、「石魂」の句は殺生石での句であり、西行の柳に関するのは「泉影」と「夏痩」の二句だけである。清水わく泉にうつる影を見て柳の糸が、見る人をつるとするのは如何にも俳諧的で、表現も巧妙である。がそこには西行追慕の情や感動はない。また夏痩せのすがたを「西行御絵」に書かれている細い柳のすがたとするなども、ただそれだけの見立ての句というにすぎない。「今西行」と呼ばれた三千風にしては、あまりにも感動がなさすぎはしないか。

つぎに佐渡についての両者の感概を見てみよう。二人とも佐渡へはわたらず、ともに出雲崎から佐渡を見た。芭蕉は

北陸道に行脚して、越後ノ国出雲崎といふ所に泊る。彼佐渡がしまは、海の面十八里、滄波を隔て、東西三十五里に、よこおりふしたり。みねの嶮難、谷の隈〳〵まで、さすがに手にとるばかり、あざやかに見わたさる。むべ此島は、こがねおほく出て、あまねく世の宝となれば、限りなき目出度島にて侍るを、大罪朝敵のたぐひ、遠流せらるゝによりて、たゞおそろしき名の聞へあるも、本意なき事におもひて、窓押開きて暫時の旅愁をいたはらむとするほど、日既に海に沈で、月ほのくらく、銀河半天にかゝりて、星きら〳〵と冴たるに、冲のかたより波の音、しば〳〵はこびてたましゐけづるがごとく、腸ちぎれて、そゞろにかなしびきたれば、草の枕も定らず、墨の袂なにゆへとはなくて、しぼるばかりになむ侍る。

あら海や佐渡に横たふあまの川　（風俗文選）

という。この文や句には、かなりの虚構があることは周知のところである。それにしても芭蕉は、佐渡が島を見、その島にまつわる悲しい人の世の出来事を思っては「たましゐけづるがごとく、腸ちぎれて、そゞろにかなしび」がわき、「草の枕も定らず、墨の袂なにゆへとはなくて、しぼるばかりになむ」あったのである。彼は、天の川を見ては天上の悠久の世界をおもい、目前の荒海や佐渡を見ては波瀾多き人世をおもい、深い感慨におそわれたのであった。

三千風は

出雲崎の浜より、北海十八里に佐渡島見ゆ。此度はさはる事侍りて、余所に見るぞ本意なしや。

（日本行脚文集）

とだけ記している。彼は、佐渡が島を芭蕉と同じく遠くからのぞみ見てはいるが、何の感動もうけていない。都合でゆけないことを残念がるという程度である。そのような心からでは、実際島にわたり自分の足で島をふみ、自分の目で島の風物を見ても、さほど感動することはなかったであろう。

三千風に欠けていたのは、詩的感動であった。彼はものを見ても、ただ見るというだけで、確実にそれを自分の心に受けとめて深い感慨にふけったり感動に全身をふるわせるというようなことをしない。彼には、そういう詩人としての資質がなかったようである。その心がなくて、如何に言辞をかざっても、結局人を動かすことはできない。土芳は、詩のうまれる間の事情を「物に入て、その微の顕て情感るや、句となる」（三冊子）といっている。ただものを漫然と見ているだけではならない。自己を対象に没入し、

それと一体になる。ものの生命にじかにふれるとき、そのものの内奥にひそんでいる本質が見えてくる。見るものの心情は感動をおぼえ、それが自然句となるのである。これは詩的創作の機微にふれた発言であろう。詩作には、まず、なによりも感動することが必要である。しかしその肝要なところが三千風には欠けていた。三千風は、さしてものごとに感動をせず、ただ観念と言語の魔術によって句をつくろうとしていたのではなかろうか。その魔術において彼はかなりの力量をしめしはした。けれども詩の生命であり根源である感動をもたぬことが、詩人としての彼には致命傷であったといわなければなるまい。

むすび

大淀三千風は元禄の俳人である。彼は談林俳諧の流れをくむとはいえ、決して特定の派閥に属していたのではない。むしろ全く独立した一個の俳人として行動していたといってよかろう。

彼の文章は晦渋にしてかなり難解である。独自の用字や訓み方がある。彼自身、自分の文章について「大やう和訓は証書を拾ふといへども、時勢粧詞（イマヤウコトバ）の文字見あたらぬ所には、詞の理をとりて、文字のつゞき、自作せし事も侍る」（日本行脚文集）といっている。文筆家としての苦心と努力と自信のほどがうかがえるのではあるが、特異の文体のゆえに彼の思想がつかみにくいものとなっている。けれども彼の文章や思想をよく検討するならば、その人生観の深さに驚くであろう。そして彼が自己の思想に忠実に実践しようとしていたことにも驚く。そこにわれわれは宗教者としての三千風を見る。抖擻の行脚を生きた三千風を見るのである。同時代に芭蕉もまた同じような目的で旅をしていた。三千風が死骸は烏狼にくわれてもかまわないといっていたとすれば、芭蕉も「野ざらしを心に風のしむ身哉」（甲子吟行）と吟じていた。両者の覚悟は全く同一であったのである。ところで芭蕉には強い我意識があり、行脚中にも時折それが顔を出していた。それは『曽良随行日記』などで知られる。その点「忍」を行じ通した三千風の方がすぐれていたともいえる。ただし宗教的実践にすぐれているものが、直ちに芸術家としてすぐれていたとはいえない。三千風が詩人として芭蕉に劣ることはいうまでもない。しかし元禄の世に芭蕉にさきだち、行脚の中に俳諧の道を完成しようとしていた三千風の思想と行動は、それなりに高く評価されるべきであろう。

（本学教授・国文学）